

多様性の時代に私達は韓国をどう捉え、 つきあっていくべきか？

『首都大学東京』の「第10回みやこ祭」が、11月2日(日)～4日(火)、秋深まる南大沢キャンパスで開催されます。

様々な企画が用意される中、『首都大学東京 同窓会』が協賛事業として行うのが特別講演会。今年度は、同大名譽教授の鄭大均(てい たいきん)氏が、「日韓関係 今日本に問われていることは何か」と題して講演します。

鄭氏は、長年にわたり人文科学分野の研究家として高等教育に携わってきた、日韓関係のスペシャリスト。来年、戦後70年を迎えるこの時に、改めて日韓関係を見つめ直す意味とは？ 鄭氏のユニークな歴史観や人類学的考察が、そのヒントを与えてくれます。

「私は、日本人の韓国に対する関心・態度の推移や日韓関係の変化に着目しながら、日本人の韓国に対する『眺め』を、大まかに4期に分けています。第1期は、日本の朝鮮統治が終焉した1945年から1965年までで、朝鮮戦争や李ライオンによる日本漁船の拿捕



【鄭大均氏】
1948年岩手県生まれ。1981年～1995年韓国の大学で教鞭をとる。1995年から東京都立大学人文科学研究科助教授、後に教授。現在、首都大学東京名誉教授。専門はエスニック研究、日韓関係。

事件がありました。多くの日本人は隣国に無関心、または関心を避けようとした時代。第2期は、1965年の国交正常化からのほぼ20年間で、日韓条約の締結により人や物・金が一方的に韓国に移動した時代です。第3期は、1984年から2012年までの時期で、日韓関係が歴史道徳的な色合いを濃くした時代。そして、第4期が2012年の夏以降。日韓にとっては葛藤の時代であり、摩擦の時代です」と鄭氏。講演では、こうした独自の時代区分を基に、日韓関係を見つめ直し、両国の今後を捉え直します。

「日韓の間には、今日でもお互いに疑念や偏見があり、様々な議論においても多数派・少数派がいて、それらは日韓関係の変化と連動しています。多様化が進む今日、よその国を見る時には、多様な視点や価値観を持つこ

とが重要。2012年以降、日韓は互いに葛藤を

続けていますが、今一度客観的に捉え直すことで、今後のあり方のヒントを見つめることができたら…。皆さんと一緒に考えたいと思います」

■第10回みやこ祭 首都大学東京同窓会講演会
「日韓関係 今日本に問われていることは何か」

(講師)鄭大均氏※首都大学東京名誉教授

▼日時/11月3日(祝)
13時半～14時半

▼会場/首都大学東京南大沢キャンパス
1号館120番教室

▼入場無料※申込不要



■鄭大均氏の主な著書■
『韓国のイメージ 戦後日本人の隣国観』(1995年/中公新書)、
『日本のイメージ』(1998年/中公新書)、
『在日の耐えられない軽さ』(2006年/中公新書)、
『在日・強制連行の神話』(2004年/文春新書) など多数

首都大学東京同窓会事務局

☎042-670-7702

八王子市南大沢1-1 首都大学東京内
(京王相模原線南大沢駅徒歩3分)

☎平日9:00～17:00
tmu-al@tmu.ac.jp